

「自己理解」(総合科目)

大学で学ぶとは——教育の歴史と現在から  
考える——(杉谷祐美子・友野清文・新田司担当)  
——「相対化による自己理解への試み」を担当して——

新 田 司

1. はじめに

私は今年度より、杉谷祐美子・友野清文両氏とともに教養コア人間理解関連科目「自己理解」(総合科目)「大学で学ぶとは——教育の歴史と現在から考える——」を担当させて頂いている。本科目は昨年度まで「歴史理解関連科目」の「歴史と人間」(総合科目)「大学で学ぶとは——大学・学校・教育の歴史」として開講されていたものを「人間理解関連科目」へ改編したものである。そこで本題に入る前に、この改編の経緯について触れておきたい。

昨年度までの科目「大学で学ぶとは——大学・学校・教育の歴史」では「経験的に知る大学・学校・教育を客観的にとらえなおすこと」、「現代社会は大学や学生に何を求めているかを理解すること」、「自分自身をみつめ、学ぶことの意味、目的意識を明確にすること」、の以上3点をねらいとして掲げていた。だが、こうした授業の趣旨が、「人間理解関連科目」の趣旨を鑑みると「歴史理解」よりも「人間理解」の方がより適切、との青山スタンダード教育機構側の判断を頂いた。ちなみに「人間理解関連科目」は、「自分とは何者であるのかを主体的に明らかにする手がかりを得ること」により、「幅広い教養を身につけ、自己理解を深化させてゆき」、「自己を学問や文化という普遍的な価値へとつなげてゆく」ことを趣旨としている。そうすると、上記科目の3つめのねらいである「自分自身をみつめ、学ぶことの意味、目的意識を明確にすること」はまさに「人間理解関連科目」の趣旨に添うものであるといえる。そこで、今年度より当機構の配慮により、より科目の趣旨にかなう「自己理解」へ改編させて頂くこととなった。以上のような経緯で「人間理解関連科目」へと改編された

ため、本科目の趣旨は昨年度のねらいがそのまま継承されており、さらに「歴史理解関連科目」にあったときよりも、いっそう科目の趣旨が適切に授業に反映させることとなった。また、授業内容については、昨年度までの歴史的な視点を重視した内容に対し、今年度より現代的な視点に重点をおいた内容へと移行した。

今年度はこうした経緯をふまえ、それぞれ次のようなテーマを設定した。杉谷氏は「現代日本の大学と学生——課題と展望——」、友野氏は「教育・学校の歩みと現代の課題——自分の教育体験を振り返るために——」、そして私は「相対化による自己理解への試み」である。各担当者がそれぞれのテーマのもと、本科目を履修する学生が大学・学校・教育を通して学ぶ意味を検討する手がかりを獲得できるよう授業を展開している。

ところで、本科目の基本的なあり方であるが、こちらも昨年度までの科目のあり方を継承しており、私の授業についてもそれらをふまえておこなっている。この点については、杉谷氏が本論集創刊号で「歴史と人間」の授業科目の概要について述べているなかにある「授業科目のねらい」、「主体的学習への転換を目指して」で示している。詳細については創刊号の53頁から56頁をご覧頂きたい。

なお、本科目の担当について一言付け加えさせて顶きたい。本科目は本来なら、杉谷・友野氏とともに昨年度担当されていた佐藤由美氏が引き続き担当されるはずであったが、佐藤氏が所属を変更されることとなり本科目の担当が困難となった。そこで、大変ありがたいことであるが、佐藤氏の代わりにと、私が担当の打診を頂いた。また、私が担当することについても、杉谷・友野両氏は快く御承知下さり、喜んで引き受けさせて頂くこととなった。

## 2. テーマ「相対化による自己理解への試み」について

次に、私が担当するパートで設定したテーマの意図について述べたい。私の授業においてキーワードとなるのが「相対化」である。広辞苑によると、「相対」には、①向き合っているもの。向かいあうこと、②相互に関係を有するこ

と。対立すること、③〔哲〕(the relative) 他に対して在るもの。他との関係、一定の状況においてだけ妥当するもの。相対者、の3つの意味があり、「絶対」が対語である。一方、「化」には、「形や性質がかわること。かえること」という意味がある。そこで「相対化」とは、あるものごとを別のあるものごとと一対にして関連させ、そのあり方を明らかにできる関係にすること、という意味になる。私の授業ではこの「相対化」の方法を用いて、学生が「自己理解」を試みることを意図している。私のおこなう4回の授業は、学生が自分自身を、各回ごとに設定するテーマと相対化させ、学生自身で自分のあり方を明らかにしてもらう、という趣向である。

ところで、私がこの授業で相対化の方法を採用したのには、私自身が相対化の重要性を感じた2つの経験に由来する。一つは学部のゼミで出会った社会史家 P. アリエスの『子供の誕生』(みすず書房)である。アリエスは中世の社会には子ども期の観念が存在せず、今日の我々がいただく子ども観が近代の創造であるとする子ども観を主張した。この斬新な主張は世界に「アリエス・ショック」をもたらしたが、同時代に生きる子どもや家族のあり方を絶対視していた当時の私にとっても、この主張はまさに大きな衝撃であった。研究領域である子どもや家族について、歴史的相対化による視点で考察することの重要性を痛感し、また常にものごとを「相対化」して考察することを心がけるようになった。こうした経験から、4年間の大学生活のなかでさまざまな学問に触れる学生が、同様の経験をする必要があるとの思いで、「相対化」の方法を採用した。

もう一つが、教員養成の教員としての経験である。現在私は青山学院大学をはじめ、いくつかの大学、専門学校で授業を担当させて頂いているが、その多くが教職課程科目である。教職科目では、教職の経験者が将来の教員の卵である学生を指導することが多く、必然的に教職担当の教員は「手本」とされる。担当者が、学校長をつとめ、豊かな現場経験をお持ちの方であれば、学生にとって最高の「手本」であろう。経験の浅い私などはとうてい学生の「手本」といえる存在にはなりえない。しかし、そんな私であっても、学生たちは私の

授業での発言、態度、彼らとの接し方、さらには人間性などが、つねに「望ましい」教職者のものであることを期待し、またそうであるはずだと無前提に考えている。さらに、学生と関わる教員が、学生に対して意図的な教育的働きかけばかりでなく、無意図的な教員のあり方や考え方、価値観などにおいて少なからぬ影響を与えるという「潜在的カリキュラム」の考え方がある。そうになると、教職を担当する教員は自覚する自己のみならず、他者から見られる、すなわち自分では意識できない自己の側面を何らかの形で認識する必要がある。教員のもつ影響力を教員自身が把握するためには、自らを学生の視点からとらえることが不可欠である。他者の視点から自己をとらえることができれば、自分が何者であるかを客観的、相対的に理解することが可能になる。この資質は教員養成に携わる教員にとっても、また未来の教員をめざす学生にとっても不可欠である。

このような他者の視点からの自己理解のあり方は、自分の適性にかなう職業を選択し、人生の方向性を定める状況におかれている学生にとっても有意義な手法であることはいうまでもない。他者の視点に立っての自己理解、さらに自己が自覚する自分と、他者から見える自分とを一致することが可能になれば、より適切な自己理解が可能になるだろう。

この授業をとおして学生たちに「相対化」による自己理解の経験してもらおうと考えたのは、以上の経験からである。では、次に各回の授業について述べていきたい。

### 3. 授業内容について

各回の授業は、担当者が作成した B5 のレジュメ 1 枚と B4 で 2 枚の資料を使ってすすめていく。レジュメでは授業全体の流れを 3 つの項目を立ててまとめ、資料の方は、授業で引用する著書の一部を載せている。引用する際は、引用部の前後を極力載せることにしている。それは、短い授業時間のため、学生が授業内で十分理解しきれない部分が出てくると思われるので、授業後に前後の資料を読むことで、授業理解が図れるだろうという意図からである。

私たちが担当するこの授業では、毎回授業内で学生に対して2,3問の課題を提示し、解答させるという形式を取っている。私の場合は授業の冒頭で1問、終わりに1~2問の課題を提示し解答させている。冒頭で示す課題ではおもに短い文章、あるいは図表などの資料を用い、基本的に何の条件も与えずに学生に読ませて、解答を記入させる。そして、授業が一通り終わった時点で、学生自身に授業の冒頭で書いた解答での見解やとらえ方が、授業を受けたことでどのように変化したかをふまえさせ、課題を解答させる。授業内容そのものも相対化の視点で展開するが、学生たち自身に授業の前後で書いた自身の記述内容を比較検討させる。こうすることで、授業のなかでも相対化が経験できるように配慮している。では各回の授業内容と課題について、それぞれ述べていく。

## 第1回 過去との相対化(歴史のなかの自分)

この回では、自己を歴史の文脈におくで自己と歴史との相対化を試みる。この回の冒頭では、相対化を理解してもらうための導入として、0. 歴史的相対化の衝撃(個人的体験より)と題して、前節で触れた私自身の「アリエス・ショック」の経験を話すことから始めている。それは、担当者自らの経験を語ることで、受講する学生にとって、「相対化」の経験がけっして縁遠いものではなく、誰もが大学の講義で経験しうるものだと認識してほしい、という担当者の期待からである。

### 〈授業内容〉

#### 1. 鏡の役割としての自分

「歴史は現代を映す鏡」をキーワードにイギリスの歴史学者 E. H. カーの『歴史とは何か』(岩波文庫)からの引用を用いて、歴史はけっして過去の事実のみをあらわすものではなく、私たちが生きる「現在」とはどのような社会なのかを理解するうえで欠くことのできない存在であることを述べる。

#### 2. 過去・現在・未来

近代ロシア史研究者 溪内謙の『現代史を学ぶ』(岩波新書)からの引用を中心にすすめていく。溪内は、歴史の目的とは「現代の問題の解決」にあるとし、

さらに歴史を学ぶこととは「人間が自分の現在を自分または他者の過去の経験に関連させること」であり、「自分がどこから来たのか、どこに向けて進んでいるのかの位置確認をより良いものにし、未来に向けて何かできるかの手掛かりを手中にしようとする思考作業」と述べている。ここでは、歴史とは現代だけでなく、未来をも探る手がかりであることを提示する。

### 3. 今を生きるということ

今を生きる学生自身が、歴史的な視点で自らを位置づけることの大切さを自覚し、歴史による「現在」の相対化が、ものごとの真実を見通す上で重要なプロセスであることを彼らに認識してもらう。ここでは広田照幸『日本人のしつけは衰退したか』（講談社現代新書）での、近年の少年犯罪に対する言説の危うさに関する記述を用いる。広田は、凶悪犯罪が起こるたびに、かつての少年たちは限度をわきまえていた、という認識には錯覚や誤解による過去の美化がなされているとし、少年の殺人件数の推移をあらわしたグラフを使い、30 数年前の一時期の方が、現在よりもはるかに多いことを示すことで歴史的な変化をふまえた議論の必要性を述べている。この少年犯罪の例をとおして、現在の視点のみでものごとを認識することの危うさを認識させ、さらに歴史的なプロセスのなかに現在を位置づけることが、現在の課題を考察する際に大きな手がかりとなりうることを気づかせ、歴史的相対化の意義を認識させる。

#### 〈課題〉

冒頭で、「警察白書」平成 14 年版にある「少年の非行・犯罪についての国民の意識」での 2 つのグラフを提示する。この資料は、少年の非行・犯罪が増えているかどうか、悪質になっているか、という全国調査での結果を円グラフで示しているものである。この調査によれば、増えている、悪質になっているがそれぞれ、過半数を超えている。これをみて「少年犯罪の凶悪化」についてコメントさせる。授業の最後で、授業内容や先に述べた広田の少年の殺人件数の推移をあらわしたグラフをふまえ、「授業を受けてみて、どう思ったか」という質問を提示して、冒頭で書いた自分のコメントとの認識の変化を比較してもらうことで、自己の認識の相対化をおこなっていく。さらに、授業の内容をふま

え、「過去と今を相対化して考えることの意味は何か」という課題を提示して、解答させる。

## 第2回 社会との相対化(他者との関係における自分)

この回では、私たち人間はなぜ社会をつくり、社会のなかで生きていることが大切なのか、社会や他者との関係をとおして考えていく。

### 〈授業内容〉

#### 1. 「人間は社会的動物である」

人間が社会で生きていくことの意味について、有名なアリストテレスの言葉をタイトルにかかげ述べる。紀元前3世紀に生きたアリストテレスがすでに人間は社会で生活する本性をもった動物であることを述べていることを示した上で、現代の教育学でかけげる人間形成の目的においても、社会に適応する能力の育成は不可欠であることを示す。さらに、もし人間が人間の社会で育つことができなれば、人間らしくなることがきわめて困難であることを「野生児」の例を用いて説明し、人間が社会で生きることの意味を再確認する。

#### 2. 社会化と社会性

私たちが社会化されることで社会の一員となり、その社会でうまく適応するために社会性を獲得する必要があることを確認していく。大学生活をおくる学生は、基本的にこうしたプロセスを経ているからこそ大学に通い、講義を受けていることができるわけだが、その当たり前の営みを改めて振り返ることで、自分にとってこのプロセスがいかに大切であることを理解させる。

#### 3. 他者理解と共感能力

私たちが社会のなかで生活し、そこで他者との関係を築く際にはいくつかの力が必要である。そのうち、ここでは他者を理解し、共感する能力について取り上げる。私たちの社会において、他者理解や共感能力がいかに必要であるのかを、門脇厚司の唱える「社会力」を手がかりに考える。彼の著書『子どもの社会力』(岩波新書)によると、「社会力」とは、「社会を作り、作った社会を運営しつつ、その社会を絶えず作り変えていくために必要な資質や能力」である。

この「社会力」を支える下地となるのが他者認識であり、他者への共感能力なのである。それは、「社会力」が「常に他の誰かのことを心にかけている人」つまり、「常に社会への関心を持ち続けている人」によって支えられているからである。なお、「社会力」の概念については、いぜんとして学問的な議論がある。だが、これから社会の一員となる学生が、社会性よりもより能動的、主体的な社会とのかかわりを求めるこの概念を知ることが有意義であると考え、授業で用いている。

#### 〈課題〉

この回の課題のキーワードは、「共感」である。課題をとおして、社会のなかで生活する際に共感能力が必要であることを実感する一方、自身のあり方が「共感」の視点に立って判断しているかどうかを認識することをめざす。この課題では福島脩美の『自己理解ハンドブック』（金子書房）の「共感」についてのテストを使用している。このテストは、恋人を親友に奪われた男の子の心理と情景描写を描いた短文から、それぞれの登場人物への心の動きを「共感」して読み取れるかどうかを試すものである。学生には、授業の冒頭で上記の短文を読ませ、「さて、この短い文をあなたはどの受け止めましたか？」「主人公の心理をどう理解しましたか？」「登場人物（三郎、春江、川合）に対してどういう感情が起きましたか？」の各質問に答えさせる。最後にこの短文についての解説、さらにこのテストの解説にある「共感」と似て非なるものである「投射」との違いを説明し、両者の違いを明確にした上で、「〈共感〉するとは、どういうことか」、そして授業全体を振り返って「人（自分）が社会（他者）とかわることの意味は何か」について解答させる。

#### 第3回 大人との相対化（子どもから大人への過程にいる自分）

この授業では、大人との相対化をおこなうために、まず子どもと大人の相違について確認することで、大人とは何かを明確にしておく。そして、子どもから大人へと発達する途上にある学生を、大人と相対化させることで、自身との差異を見だし大人とは何かを認識することで、大人になることの意味を探る。

## 〈授業内容〉

### 1. 子どもとは何か(子ども観)

ここでは子ども観を明らかにすることで、大人のあり方をより明確にする。はじめに、再度アリエスの『子供の誕生』にある中世の子ども観(「小さな大人」)を確認し、次に「子どもの発見」といわれ、近代における子ども観を決定づけたルソーの『エミール』の一文を引用し、今日の子ども観を確認する。

### 2. 大人とは

20世紀に子どもから大人への移行期として登場する「青年期」の概念を中心に、その前後の時代での大人のあり方を確認していく。「青年期」が登場する以前の社会には「一人前」の概念があった。「一人前」の社会は通過儀礼により大人と子どもとの境界が明らかで、大人の概念も明確であった。しかし、産業革命による社会の変革は、労働の義務が免除され、将来の職業や人生選択のための準備期間となる「青年期」を登場させた。このことは子どもを家族や学校へと「囲い込み」、かつての「一人前」を基本とする大人の概念を崩壊させた。この、子どもでも大人でもない「青年期」の成立が、新たな大人の概念の形成を要求し、他方で大人になることの困難さをもたらしたことを示す。さらに日本の状況に関しても、『シティズンシップの教育思想』(白澤社)での小玉重夫の指摘から大人になることの困難を示す。小玉によると、戦後日本の高度経済成長を支えていたのは、家族・学校・企業社会の三位一体のトライアングルである。この構図は「子どもを大人の世界から家族、学校へと隔離、保護」する一方で、「学校を卒業して企業に就職するということ」と「大人になるということ」とはほぼイコールの関係とし、「卒業＝就職＝大人というふうに、子どもから成人へと移行すること、すなわち大人になる」ことを位置づけていた。しかし、バブル崩壊後、この構図が動揺することで、子どもと大人の境界が揺らぎ、青年期の若者にとって大人になることが困難になった、と小玉は指摘している。この指摘は、フリーターやニートの問題、さらに就職＝大人の図式を描くことができないなかで、新たな大人のあり方を学生に考察させる問題提起となる。

### 3. シティズンシップの概念による大人のあり方

新たな大人の概念を模索する必要性を提起した上で、この授業では最後に「シティズンシップ」の概念を提示することで、青年期にある学生が大人とは何かを考える手がかりとする。シティズンシップの定義に関しては、イギリスの社会学者 G. ジョーンズ、C. ウォーレスの『若者はなぜ大人になれないのか』（宮本みち子監訳、新評論）を紹介する。さらに『若者が《社会的弱者》に転落する』（洋泉社新書 y）の著者である宮本みち子が、その著書で取り上げている海外での取り組みの部分を用いる。大人になる上で必要なこととして宮本があげているのが、若者の社会参加の機会を保障することと、親元を離れて「自立」することができるように準備教育を施すことである。最終的に、大人であることのメルクマールが「自立」であることを学生に再確認させる。

#### 〈課題〉

大人とは何か、の問いに対して明確にこれだと言いきれるものを示すのは難しいが、ここでは先に述べたように「自立」をキーワードに課題を課している。冒頭では、まず「〈大人〉と〈子ども〉の違い」を課題として出題し書かせる。それぞれに大人像を描いてもらうことで、大人について考える動機づけとする。いっぽうで、あらかじめ「〈自立〉という言葉を念頭において授業を受けるように」、とアナウンスする。こうすることで、大人とは何かを考察する際に、「自立」することとはどういうことか、についても同時に考えながら授業を受けることができる考えるからである。最後に、「自立」の具体的な事例を宮本みち子の引用より提示することで、「〈自立〉とはどういうことか」について、さらに「〈自立〉する上で自分にとって必要なものは何か」について解答してもらう。この2つの問いにより、学生に自身を、授業で提示した大人のあり方と相対化させ、自身への課題をあげることで、大人になるということはどういうことか、という意識をよりいっそう喚起する。

### 第4回 自己の内面との相対化(自分とは何者なのか)

最終回は、自分自身を自己の内面と相対化させることで、自分とはいったい

何者なのかを考察し、自己理解を試みる手がかりを提示する。

〈授業内容〉

1. 「自分とは何者か」への探求

ソクラテスの「無知の知」、デカルトの「我思うゆえに我あり」を取り上げ、かつての時代から私たち人間は自分とは何者なのかを探求してきたことを確認する

2. 自我と自己

私たちは自我と自己という言葉をも混同して用いることが多い。この項目では、酒井潔の『自我の哲学史』（講談社現代新書）を頼りに両者の概念を整理した上で、自我と自己との関係を示し、「自己」の意味について明らかにする。酒井によれば、自我とは「意志や行為の主体、文の主語である」のに対し、自己は「自我によって知られたり、自我から何らかの作用を受けたりするかぎりでの自我」、すなわち「自我それ自身が認識や意志・行為の対象として、文の目的語として見られるとき、それは〈自己〉と呼ばれ」、「主体的、主語的な自我とは区別」されるもの、と述べている。この自我と自己の関係こそが、私の授業のテーマである、自身と自己の内面との相対化を言い表している部分である。主語の私を、再帰的、反省的な係わり合いそのもの（「私が私を何々する」、「私が私に何々する」）である自己によって自身を振り返ることで、私たちは初めて「自己を理解する」ことになることを学生に認識してもらう。

3. 「自分を知る」ということ

自己を理解する、とはどういうことなのかについてのまとめとなる。ここでは、後述するが、冒頭で学生に示す「ジョハリの窓」がすべて「本当の自分」であることを示したうえで、ありのままの自分を受け入れる「自己受容」の視点からの自己理解をめざす。

〈課題〉

この回では、先で述べたように冒頭で「ジョハリの窓」を示し、4つの窓の問いを解答させる。その際、テスト用紙の方には「そのなかで本当の自分とはどれか、さらにそれはなぜか理由をあげよ」という課題を出し、答えさせる。こ

の課題では、自分が認識できることがらが「本当の自分」であると解答する学生が大半だと予想される。そこで、あらかじめ「本当の自分」を選択させることで、さきの授業内容の3で述べたように「本当の自分」とはすべてである、ということをやより強く印象的に自覚できるのではないかと考えて出題している。最後に「〈自己を理解する〉ことにどのような意味があるか」の問いを投げかけることで、改めて自己理解の意味を考えてもらい、一番最後に「〈相対化〉して物事を考えることに、どのような意味があるか」の問いを投げかけ、私のパート全体を振り返り、主体的に考察させて終わりにする。

#### 4. おわりに——今後の課題

今年度より本科目を担当させて頂き、授業自体も一から作りあげて臨んだので、私にとってあらゆることが手探り状態であった。本科目では、3人の担当者がローテーションで1クラス当たり4回づつの授業を担当するので、半期の間に同じ授業を計3回させて頂ける。このことは、授業を改善する機会を2回与えられるともいえ、短期間のうちに授業の修正が可能になることは、私にとって大変ありがたいことであった。ただ、一方で杉谷、友野両氏と比べ授業の質が低かったことは容易に想像され、お二人の足を引っ張ることになり、ご迷惑をおかけした。この点は、後期の授業に臨むに当たり努力していきたい。

授業の方法についての課題について。前節で述べてきたように、私の授業では冒頭に書かせたものを、授業を受けることでえた認識と相対化させることで、学生が「相対化」への理解や認識をやより深められることをめざした。しかし、冒頭で提示する課題が適切かどうかという点、さらに授業内容が課題と的確に関連しているかどうかの妥当性については、いっそうの改善が必要であることを実感する。学生の解答をみると、担当者からみても射ていない解答が目立つ。これは学生の理解力もあるだろうが、それ以上に担当者の授業構成に問題があると思われる。後期の授業においては、再度学生の解答を分析し、吟味して可能な改善を図るつもりである。

課題の適切さについて検討が必要と思われる点をもう一つあげる。それは課

題が学生の自己理解を深めるものであったかどうかである。担当者の意図が的確に伝えきれていないと思われるような学生の解答も目立ち、この点も学生の理解力以上に、担当者の思い込みや独断からの課題提示もあったと思われるので、改めて吟味していきたい。

課題はほかにも多々あると思われるが、折に触れご指導，ご教示頂ければ幸いである。最後に、不慣れで未熟な担当者を常に暖かく見守り，適切なフォローを頂き，またこの拙稿についても，冒頭部に関してご進言頂いた杉谷，友野両氏に厚く感謝申し上げたい。